

# 平成28年度 第1回 佐倉市立美術館運営協議会

## 議事録

日 時：平成28年8月20日（土） 15：00～17：00

場 所：佐倉市立美術館 4階会議室

出席者：以下のとおり

(委 員 9名)

樋田委員（会長）、大久保委員、齊藤委員、高橋委員、田中委員、  
豊田委員、広本委員、村田委員、安本委員

(美術館職員 5名)

宍戸館長、永山主査（学芸員）、黒川学芸員、小川主査補、  
山本主事（学芸員）

### 会議次第

1. 開 会
  2. あいさつ
  3. 報告事項
    - ・平成27年度事業報告について（公 開）
    - ・平成28年度事業計画等について（公 開）
    - ・平成28年度臨時休館について（公 開）
  4. 資料の受け入れについて（非公開）
  5. 閉 会
- < 展覧会鑑賞 >

### 【3. 報告事項】

平成27年度事業報告について

＜資料に基づき、美術館から説明＞

（委員）平成27年度に開催された「魔法の美術館」のワークショップの参加者数が、7人、8人と少ないのは何か理由があるのですか？

（美術館）講師である作家がなるべく子どもたち一人一人に丁寧に教えたいという意向が強かったため、定員を少なくしたことや、当日に体調不良などで休まれた方がおられたためと思われます。

（委員）「魔法の美術館」は入場者数が過去最高となり、この美術館にとってこれまでに経験したことの無い大勢の鑑賞者が訪れた訳ですが、このことについてどう分析しておられますか？単純に数が多ければ良いということではありませんが、このような人数を集めることが出来た、ということについてもう少し説明していただけますか？

（美術館）平成26年度は「浅井忠展」や「安井曾太郎展」という割とオーソドックスな展覧会を続けて開催いたしましたので、平成27年度は、これまで美術館を利用していない市民に対してアピールするような展覧会を開催し、そういった方々に情報を届けるにはどうしたらよいのか考えました。「高橋真琴の原画展」では、漫画の愛好家向けに、「魔法の美術館」では、親子向けの情報欄に展覧会情報を送りました。また、この展覧会が当館での開催前に埼玉スーパーアリーナで開催されていたことから、埼玉県や東京都方面ではなく、千葉県と近隣地域、千葉県南部に向け、そのエリアで放送されるケーブルテレビに依頼して動画コマーシャルを制作し、放送いたしました。想定される対象にアピールしたことが動員に結びついた要因の一つではないかと考えております。

（委員）広報活動が実を結んで動員が伸びたということは大変結構だと思います。ただ、美術館が見せたい展覧会と、世の中の人々が美術館に求めているものが、ここで一致したとすると、美術館側がこれをどう考えておられるのか、お尋ねしたかったのです。

（会長）今の質問はなかなか奥が深いと思います。これまでに無いタイプの展覧会だったので、市民の方々が観て色々な意見があるのではないかと思います。そのことについて委員の皆さんはどのような意見を持っておられますか？

（委員）これまでの展覧会では鑑賞者は一方的に「見せられる」というか、一方通行でしたが、この展覧会では自分たちが参加し、主役になれることが関心に結びついたのではないかと思います。ただし、飴を舐めたり、ジュースを飲んだり、美術館が遊び場として認識されることが拡大される傾向については、ブレーキをかける必要があるのではないのでしょうか。

（委員）今はコンピューターやスマートフォンが普及しています。大人が説明書を見ながら扱うのとは違い、生まれた時からそういったものがある今の子ども達は本当に感覚で動いていく、そういう時代にマッチした展覧会だったのではないのでしょうか。入場者数が1位なのに、チケット収入が少ないのは、無料パスポートを使った方が多かったということ

ですね。子どもが少なくなってきた時代にこの無料パスポートの利用率は、単純にこの展覧会を「面白そう」と感じた親子世代が多かったのではないかと思います。

(委員) 子どもは、実際に確認してみたい、触ってみたいと思うものではないでしょうか。この展覧会を拝見すると鑑賞するだけの美術館ではなくなってきた、という感じがします。これからの時代には、必要な要素なのかもしれません。ただし、展示資料に傷のつかない良い方法など、それぞれの分野の中で支障の無い方法を検討される必要があるのではないのでしょうか。

(委員) 無料パスポートの使用率が20%というのは驚異的な数字だと感じました。県の博物館でも無料パスポートを配布しておりますが、なかなか使ってもらえません。親子の利用者が多いと思うのですが、子どもが観たいというと、親は足を運びますが、子どもが観たくないというと親は自分が観たくても「まあ、いいや」となります。その意味では有料利用者も少しは取り込めたのではないのでしょうか。展覧会の際、触れてはいけないというのが大原則だと思うのですが、利用者の要望に何も対応せず、旧態依然としているのもいけないと思います。全部の展示がそうなる必要はありませんが、一つの例として、ワークショップとか参加型という、触れてもいいに近い感じの展示をすることによって、利用者も展覧会に「参加する」という感覚を持つのではないかと思います。それが美術館の利用者の裾野を広げることにつながるはずで、今年、2年目を迎える「ミテ・ハナソウ展」の影響も少なくないのではないのでしょうか。近隣の美術館で見ると、千葉市美術館の鑑賞教室が朝日新聞で取りあげられて、平成16年から始めて、最初900人だったのが、現在では2,000人の利用者があるようです。「ミテ・ハナソウ展」も持続することによって、利用者の裾野を広げることに効果があると思います。

(会長) こういう先端科学技術というものが、地域にどのように取り入れられていったかという側面もあったと思いますが、それについては如何ですか？

(委員) 分かりやすく言うと、スマートフォンのゲームが会場いっぱい広がっていることに子ども達は興奮したのだと思います。通常の展覧会とは全く違う世界なのですね。このような展覧会は東京都現代美術館でも森美術館でも開催していません。企画会社の立てた企画というところは気になりますが、例えばこの展覧会で一番評判の良かった人をもう一度、何らかの形でお願いするとか。こういった最先端のメディア・アートというのは、来年はまた進化していると思われそうです。

(委員) 佐倉市内には国立歴史民俗博物館、DIC川村記念美術館、佐倉市立美術館があります。科学系、水族館が無いということで、市民が科学に関する表現に触れる機会がない状況を上手くついた展覧会ではなかったのでしょうか。川崎市にある東芝科学館に行くと、年中子ども達で賑わっている状態です。佐倉市のイメージを打ち破る一つのきっかけとして、今後も続けて行かれると良いと思います。学芸員の調査研究を反映した形でもう少し「アートと科学」について掘り下げると、面白いテーマはあると思います。佐倉は蘭学とのゆかりもあるので、歴史民俗博物館から科学関連の資料をお借りするなどして、「アートと科学」というテーマは美術館としても面白いかもしれません。

(会長) 最先端科学を美術の視点から見るということをやっている施設は、日本では山口情報芸術センター(YCAM)、せんだいメディアテーク、国立科学博物館くらいでしょうか？ フランスでは沢山ありますね。もしも、日本でこうした路線の展覧会を進めてい

くと、将来どのようなことが待っていると思われませんか？ つまり、日本では面白いと思う反面、あまり本気でやらないでしょう？

(委員) 山口では、山口情報芸術センターの他、山口県立美術館や山口県立山口博物館があつて、住み分けが行われています。一つの館で美術館、博物館、科学系のメディア・アート、全部やっているようなところはおそらく無いと思われませんか。将来どうなるか、という質問についてはある意味難しい決断をしなければならない時がくるかもしれません。佐倉市立美術館は浅井忠の研究は止めて、これからは最先端のメディア・アートを専門にして、という未来が来るかもしれません。現在、最先端のメディア・アートは確かに注目されていて、ロンドンでも紹介されていたりしますが、逆にファイン・アートの逆襲という時代に入りかかっている、いわゆる洋画、日本画、彫刻、書、といったアナログ系の美術が世界的に見直されています。手仕事というか、手で描く、手でデッサンする、という原点回帰の風潮も見られます。佐倉市立美術館はファイン・アートを守りながら、同時にこういうメディア・アートもやっていくというバランス感覚が大事なかなと思います。

(委員) 金沢21世紀美術館は体験型のインスタレーションがあることで、観光名所になっていますね。現代美術であれだけ来館者を集めるということは正直、同館が出来るまでは想像もしていませんでした。この美術館においても常設は無理だとしても、企画展において何年かに一回、続けて紹介することによって佐倉市立美術館の知名度アップにつながるのではないかと思います。ただ、私の勤務する博物館も企画展において必ずデジタルの展示をするのですが、小・中学生は手を出しますが、中年以上の方は手を出さない。フロアスタッフが説明しても、「そうですか」と言って、通り過ぎてしまう。どう工夫して色々な人に利用してもらおうのかが課題ではないでしょうか。

#### 平成28年度事業計画等について ＜資料に基づき、美術館から説明＞

(会長) 「カオスモス展」について、24日間という展覧会期間は短すぎるように感じるのですが、何か理由があるのですか？

(美術館) 改修工事が平成29年2月末日までなので、止むを得ず3月からの開催となっているのですが、事業期間が平成29年度にまたいでしまうのは、好ましくないということで、今年度のみ開催といたしました。

(委員) この件については、改修工事がある今年度だけの問題ということですね？

(美術館) 3月から4月というのは人が動く時期だということは理解しております。この件については庁内でもう一度よく検討させていただきたいと思います。

(会長) せっかく長い時間をかけて準備した展覧会がすぐ終わってしまうのは、もったいないと思いますので、是非再検討の要望をして下さい。

(美術館) ここで、教育普及事業について、担当者から委員の皆様にご意見等をいただきたいことがあります。ついては、「ミテ・ハナソウ・プロジェクト」で作成したアートカードを配らせていただきます。

(美術館) 今、お配りしたカードは美術館での対話型鑑賞を行う前に、学校でおこなう事前授業で使用するものです。また、本年11月からの休館中はこのカードを使った出前授業を行いたいと考えております。

このように「ミテ・ハナソウ・プロジェクト」は進んでいるのですが、色々と問題点も出てきました。そもそもこの美術館は開館時間や弁当を食べる場所など、施設として、学校団体の受入れ態勢が整っていません。当館の学校連携事業は、市内の小中学校34校全てに参加していただくことを将来的な目標として始まっていますが、これを進めていくには、これまでのやり方では難しいと感じています。また、

①対話型鑑賞は、他館のように休館日や開館前に実施すべきかどうか。

②ボランティアからは学校だけでなく、高齢者施設を対象にするアイデアが出ていますが、両方やっていくべきかどうか。

③対話型鑑賞に適した収蔵作品が少なく、収蔵作品を使った「ミテ・ハナソウ展」は2回で限界という状況ですが、この展覧会を今後も続けていくべきかどうか

など、この事業をこのまま拡大していくかどうかについてご意見をいただけると幸いです。

(会長) 要するに、今後の教育普及活動についてアドバイスが欲しいということですね。

(委員) 市内の小中学校全校について教育普及活動に参加してもらおうという目標は立派だと思いますが、なかなか大変だと思います。東京都美術館では、一般の来館者の来ない休館日に教育普及事業を開催することで、住み分けを行っていました。水戸芸術館では、美術好きの高校生が集まることの出来る部活みたいな部屋を一つ持っています。そうした場所が拠点となって、学校と美術館の連携が深まっているようです。そんなに広い場所でなくても良いので、検討なさってみては如何でしょうか。この辺でマネージメントを考え直す必要があるのかもしれませんが。今までの学校連携に見られる「公平に広く呼びかけて」も成果を上げているのですが、「狭く深く」という視点をもって「美術館のサポーターを育てていく」というような美術館へのリターンを明確にしていく方法もこれからは必要かもしれません。

また、先程お話に合ったように、収蔵作品の数も限られているので、オリジナルにこだわることなく、「複製を活用する」という方法も良いのではないのでしょうか。千葉県立現代産業科学館等のサイエンス・ミュージアムでは複製は問題ありません。世界の名画のレプリカを使って、触っても良い展示をすることも可能ですよね。一度、問題点を整理して、体制を整えることを考えてみてはどうでしょう。

また、佐倉美術協会から作品を借りることを検討なさるのも、良いかもしれません。その場合、作家から直接お話を聞く事が出来ます。ボランティアと子ども達だけでなく、描いた本人がいるということで、対話が弾むこともあるのではないのでしょうか。まだまだ教育普及活動も開発の余地があるのではないのでしょうか？

(委員) 毎年、新春佐倉美術展ではギャラリートークを開催していますが、制作した人がどういう人か分かると、その作品を身近に感じるような気がします。教育普及活動については、地域に美術館の存在を知らしめる方法として有効であると思います。

(委員) これまで新春展などに出品してきましたが、そうした協力の仕方があるとは考えてもみませんでした。美術協会(工芸)としても、市民に何かご協力出来ることがあれば、良いことではないかと思えます。

(委員) あることをきっかけとして言葉を交し合う、確かに対話で変わっていくこともあると思います。個人差があると思いますが、具体的なプランが進んでいくようでしたら、皆さん協力なさるのではないかと思います。

(委員) まず、文部科学省が定めた「教育課程」というものがあり、佐倉市立美術館のこの活動がそれにどう対応するか分かるようにしたら如何でしょう。市内の小中学校の先生と美術館がプロジェクトを組んで、学校が美術館を利用するための手引書を作られたら良いではありませんか? 冊子を作るのに何年もかかり、大変だと思われそうですが、その方がスムーズに進むのではありませんか?

(会長) 教育普及というのは「近代美術とはこういうものである」という既存の価値を伝えるイメージがあるのですが、多分、今お話になった委員の方々は、そういったお話はなさらないと思います。上から授けようとするのではなく、美術館にとっての教育というか、これまでに無い考え方を発掘するような方法を探ってみて下さい。物理的に教育普及の専門家を増員するのとは別に、佐倉美術協会の先生方を上手に活用する方法を是非考えてみて下さい。

平成28年度臨時休館について

<資料に基づき、美術館から説明>

(会長) このことについて、何か質問のある方はおられますか?

(委員) 特にありません。

以下、非公開

【協議事項】

4. 作品の受け入れについて（非公開）

<寄贈資料について、美術館から説明>

<寄贈資料について、委員による観覧>

永倉江村人の資料の寄贈について

（会長）では、この資料について寄贈を受け入れてよいかというところまで、委員全員のご意見を伺いたいと思います。

（委員）佐倉にゆかりのある作家を発掘していくということは、美術館の収集方針にも当てはまりますし、その調査研究の端初となる資料となるように思われます。今、実際に拝見して傷み具合が確認できました。作品ではなく、資料として受け入れるという意味がよく分かりました。

（会長）皆さん、賛成ということよろしいですか。

（委員全員）はい。

（会長）はい、ではこの資料2点を受け入れることにいたします。

永倉江村人の資料の評価について（非公開）

（会長）それでは作品評価ということですね。

（美術館）今回の評価額については、古美術商が取り扱った同等の資料が6万円であったことから、修復費などを差し引いて1点3万円位ではないかと考えました。

（委員）それは少し安すぎるのではないかと思います。1点5万円位では如何ですか？

（会長）では、永倉江村人の資料については、1点5万円として、2点で10万円という評価でよろしいですか？

（委員全員）はい。

（会長）はい、ではこの資料の評価額を10万円といたします。

（美術館）ありがとうございました。